



相談員支援センターだより



中間貯蔵施設工事と環境再生の情報発信 中間貯蔵工事情報センター



中間貯蔵工事情報センターは双葉郡大熊町の中間貯蔵施設区域内に中間貯蔵施設工事の進捗状況を中心とする福島環境再生に向けた取組を紹介する施設として平成31年1月31日に開所しました。放射線モニタリング情報やドローンを使った区域内の空撮映像、中間貯蔵施設が立地する大熊町と双葉町に関する情報等の提供を通じて、中間貯蔵工事の進展と、福島環境再生・復興に向けた貢献について紹介しています。

——中間貯蔵工事情報センターでは中間貯蔵施設工事の概要や安全への取組だけでなく、放射線や地域の情報等も発信されていますが、来館者にはどのような方がいらっしゃいますか。

一般の方をはじめとして、行政や企業の方など様々な方にご来館いただいています。とりわけ県外から来てくださる方が多く、年齢層は40～

60代の方が多く印象ですが、県内外から高校生や大学生のグループなど若い世代の方が見学に来てくれることもあります。

——館内の展示物等に関して、工夫していることや意識していることはありますか。

放射線モニタリング情報の展示では、日本全国の放射線量を公開し、あらゆる地域と比較することで、現在の福島県の状況を知っていただけるような展示をしています。また、公開している情報は1週間に1回を目安に最新のデータに更新しています。

——映像を使用した展示が多く、全体的に見やすさを感じました。中間貯蔵施設の見学会も定期的開催されていますが、参加状況はいかがですか。

おかげさまで多くの方にご参加いただいております。しばしば定員を超えるご応募をいただくこともあり、これまで月に1回のペースで開催していた見学会を、令和2年12月より月に2回の開催に変更して、各回に午前の部と午後の部を設けることで、実質計4回の見学ができるようにいたしました。また、これまでの見学会では大熊町の中間貯蔵施設のみの見学でしたが、参加された方からの要望が多かったこともあり、自治体の許可を得て、令和3年1月からは双葉町の中間貯蔵施設も見学が可能になります。

——見学できる範囲が広がることで、より詳しく中間貯蔵施設について知ることができると思います。

見学会は一般の方の他に、地元企業や自治体が研修の一環としてご利用されることや、中間貯蔵

施設の工事等に携わっているメーカーの方が別の視点で工事の進捗を見るためにご参加されることもあります。見学会の回数を増やしたり、見学の範囲を広げたりすることで、より多くの方々に中間貯蔵施設について正しく知っていただくきっかけになれば嬉しく思います。

また、避難によって地元を離れている住民の方で、見学会への参加を希望しているが、指定の日程で参加が難しいという場合は、ご相談いただければ個別の対応としてマイクロバスを手配するなどの調整は可能です。

——中間貯蔵工事情報センターを利用された方や見学会の参加者の方から不安の声を聞いたり相談を受けたりすることはありますか。

ネガティブな意見はほとんどお聞きしません。どちらかと言えば中間貯蔵に係わる事業にある程度理解を示してくださっている方が多いような印象です。引き続き正確な情報を発信することで不安の払拭につなげていきたいです。

——まもなく東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から10年を迎えますが、今後取り組んでいきたいと考えていることはありますか。

現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、当館への入場者数を制限する等の対応を余儀なくされていることから、直接ご来館いただくだけでも中間貯蔵施設について知ることができるよう、ホームページの充実化を図る検討をしているところです。しかしながら、実際に足を運んでいただき、直接見ていただきたいという気持ちもあります。今年は事故後10年という節目の年ということもあり、特別展のような企画も検討しておりますので、ご来館と見学会へのご参加をお待ちしております。

——中間貯蔵施設工事の取組や情報提供について、より詳しく知ることができました。本日はありがとうございました。

研修会の例

放射線の健康影響等に関する研修会

環境省と福島県が主催する研修会を、福島県教育委員会の共催で、11月27日に郡山市のホテルハマツで行いました。今回の研修会は県内の自治体職員や教職員等を対象として、住民の方や県外の方から福島県内の放射線に関わる問い合わせを受けた際、回答するための知識を養うことを目的として実施し、当日会場に来られない方のためにオンラインでも参加できるように対応しました。



研修会では2つの講演と福島県県民健康調査に関する情報提供が行われ、はじめの「放射線の基礎知識と健康への影響」の講演では、福島県立医科大学医学部放射線腫瘍学講座の佐藤久志講師からお話をいただきました。講演の内容は福島県の原子力災害について、放射線の基礎知識、放射線による健康影響の3つのセクションに分けられており、項目ごとに丁寧な説明がありました。私たちが普段生活をしている上で、どの程度の量の放射線を体を受けているのか、また、どのようにすれば体に受ける量を減らすことができるのかを距離と遮へいと時間について例に挙げながら説明をする等、身近にある放射線の話も多く取り上げた内容となっていました。次に福島県県民健康調査課より県民健康調査の概要や結果等について、資料の説明を通して情報共有が行われました。最後に行われた「住民対応を目的と

したリスクコミュニケーションの基礎」の講演では、特定非営利活動法人 HSE リスク・シーキューブの土屋智子理事より、新しいリスクコミュニケーションの考え方や住民と関わる上での行政や相談員の役割等についてお話をしていただきました。新しいリスクコミュニケーションにおいては相手の気持ちを変えることなく、相手と気持ちを通わせ、リスクについて共に考えることや信頼関係を作っていくことが大切であることなどをお話いただき、日々の業務において応用できる内容となっていました。



講演終了後、参加者を対象に行ったアンケートには、「今後、放射線影響に関する相談を受ける際に役立つ内容であった」、「リスクコミュニケーションの講義はこれまであまり受講したことがなかったので非常に為になった。これまでの住民対応では科学的な見地からの答え方しかしていなかったが、リスクコミュニケーションの観点も加えて取り組んでいきたい」等の感想がありました。今回の研修会では放射線に関する知識だけでなく、相手の気持ちに寄り添い、意見に耳を傾けることの大切さなど、相談対応の姿勢についても学ぶことができました。



車座意見交換会の例 檜葉町前原地区 車座意見交換会

檜葉町住民福祉課より、檜葉町食生活改善推進委員会が地域で活動しているサロン等の中で、食品から摂取する放射性物質の影響等について、専門家の講話を受けるとともに、専門家を交えた住民同士の意見交換の場を設けたいとの要望を受け、11月11日に檜葉町前原地区集会所で車座意見交換会を行いました。



専門家に福島大学農学群食農学類の二瓶直登准教授をお招きし、放射線と食の安全についてお話をしていただきました。農作物が放射性セシウムを吸収してしまう理由や、どのような種類の山菜や魚に放射性セシウム濃度が高い傾向が見られるのかなど、モニタリング結果を紹介しながら解説しました。参加者の中には畑で野菜を育てている方もおり、身近な食品に関する話に何度も頷きながら興味深く耳を傾けている様子でした。講話の後は、檜葉町食生活改善推進委員会の皆さんが調理してくれた町名物のすいとんをいただきながら意見交換をしました。すいとんには参加者の方が自家栽培した検査済みのネギが使われており、検査結果表を見ながら、食べても健康に影響がない結果であることを二瓶先生が説明しました。参加者の方から先生に積極的に話しかけたり、質問をしたりする様子も見られ、時折笑いも交えながら和やかな雰囲気の中、意見交換が行われました。



檜葉町食生活改善推進委員会は昭和 62 年に設立したボランティア団体で、町の皆さんが元気に生活できるように、健康でおいしい食事作りを広める活動をしています。東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故後、しばらくの間休会を余儀なくされておりましたが、平成 26 年に活動を再開し、檜葉町住民福祉課と協力して町内で放射線と食の安全についての車座意見交換会を開催してきました。昨年度、その功績が認められ農林水産大臣賞を受賞しました。今回の車座意見交換会の開催後、参加者を対象に行ったアンケートには「放射線に対して、改めて認識することができた」、「年月が経過するにつれて、放射線の影響による不安が薄れてくるのが現状であった」等の感想があり、こうした取り組みは震災からまもなく 10 年が経とうとしている現在でも、住民の方が放射線や食の安全について考える貴重な機会になっていると感じました。

車座意見交換会の例 県北ふたば会 車座意見交換会

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の影響により、双葉町から県北地区に避難をしている方達の自治会である県北ふたば会から要望があり、11 月 13 日に車座意見交換会を行いました。今回の会では今年 3 月に避難指示が解除された双葉駅周辺と 9 月にオープンしたアーカイブ拠点施設「東日本大震災・原子力災害伝承館」の見学を行い、そこで感じたことや思うことについて意見交換をしました。

午前中に双葉駅周辺を見学し、今年 10 月にオープンした双葉町産業交流センターにて昼食をとった後、東日本大震災・原子力災害伝承館で原子力災害と復興の記録や教訓についての展示資料の見学と意見交換会を行いました。

意見交換会には放射線の専門家として原子力安全研究協会の山田孝一先生が同席し、住民の方の放射線に関する質問に回答しました。例えば、「放射性物質が食べ物と一緒に体内に入った場合、体内に蓄積されるのか」という質問に対し、「100 日ほど経過すると、体内に入った放射性物質のおよそ半分は代謝によって体外に排出され、1 年後にはかなり少なくなる」と回答をしました。



会の終了後に行ったアンケートには「震災や原子力災害について若い人にも伝えてほしい」、「現在程度の放射線量であれば体への影響は少ないと思う」等の意見が挙げられました。また、意見交換の中で、「震災から 9 年半が経って、復興が進んだように感じるものの、町の様子が震災前とは変わってしまい、昔の風景が無くなってしまっていることを残念に思う」との意見もあり、復興に伴う変化に対する住民の方の気持ちをうかがい知ることができました。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.25

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6
いわきセンタービル5階、6階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

